明日のために

地理学科闘争委員会

「そして同志」諸君！

「ハーサルは終った。さあ本番をはじめよう」　日大生共斗書記長・文闘委委員長、田村正敏君はこう記している。

そして、我々は、新らたなる闘いを準備し、展開した。法学両学部の闘いに続き、一般主義的、一揆主義的斗いを批判する中から、七の名の行動隊による斗いが大衆的確認のもとに戦われた。行動隊は文学通り、文理を制圧した。多くの学友諸君は、圧倒的指導で行動隊をむかえた。この日の斗いをふまえ我々は次の斗いを準備しなければならない。課題が設定される。すなわち、一定程度の流動化を作り出したならばそれをどう発展させ激動を作りだすのかという。連続した斗いを我々が能動的に作り出せるのかという。この点をふまえ、我々の斗いは、自的意識的になにを追求するのかをはっきりさせねばならない。

すべての学友諸君！　三十四億円の使途不明金に端を発した御茶ノ水ボス支配体制を粉砕する権力斗争としての地平に至している。「帝大解体＝二重権力創出」の斗いとしての東大＝日大斗争は、10・8羽田斗争の切り開いた反帝国主義の実力斗争と明確に結合・統一された。しかしながら四・二八神田解放斗争での日大全共斗の隊列は二百名に及ばなかったのだ。すなわち日大全共斗としての自的意識性の欠如ともいうべきことによる現在の斗争の地平に対する認識の立遅れがもたらし、大衆の分散化をもたらした。この原因の一つは全共斗の内部の問題としてもあった。すなわち10・8佐藤発言をめぐる問題として日大斗争のさらなる発展と全国大学斗争との結合に求めようとした革命的に対する、反帝反スターリン主義大統一路線にたってこの理解できず、全共斗運動を実践的行動隊になく得する場所としての一本ズリ場としか把握できない諸君のセクト的対応のように総体として運動を理解できない諸君がいたこと。そして、そのことを許していたことである。その原因の一つは全共斗争に対する二月反動の嵐の中で、日大の徹底成果を成えず、総退却さざるをえない　文理の徹底抗戦と組織温存　名をもってセクト的に成績逃亡し、セクトを批判することはなさない。だなどれてはならない観点が存在するのだ。大衆から見た場合、諸党派の政治指導の中に自己主体的意識的立ちおくれを自覚し、階級的視座を確立してゆく方向で実践をふみつつ能動的主体的肯定的に向かとあってゆかねばならない。そういった努力と決意を抜きにして党派の独占性を引き回しを批判したところで、それは無責任にしてなつそもである。その観点をぬきにした批判、ヒボーチュウショウが斗いの一程度の多くの学友からだされた。展望のでないのは、自己の責任をぬきにしてセクトの責任におしつけた。権利と主張するのは筋違いなと教えられた。不毛・不毛・不毛であった。ノンセクトは一過程として学友諸君・全国の大学に対する3月反動として、大学当局からの大学当局の全国的大学斗争のコーヨを粉砕し斗いを進めねばならない。全国全共斗連合をもつてして、斗いねばならない。そして日大5月決戦は、その反動を全国全共斗連合の先頭にたち粉砕するという任務を負わされている。この日大決戦は11月佐藤訪米をして神聖の解体主義的決着をつけ、七〇年代階級攻防戦の勝敗をつけようとする帝国主義者に対するヨリの安保廃棄の突破口として、我々能動的斗いをもつて拡大し、人民に有効化をもたらす日米とともにもたらす。明日君に十・八を二・十八それをもたらす斗いを展開せねばならない。二の点をふまえたうえで、すべての戦いは、すべての戦術は最終基定されるだろう。地理学科斗争委員会は、革命的情勢と言い人間的対情のもとの9月日大決戦とそれにつづく11月佐藤訪米粉砕斗争、そして安保粉砕・沖縄解放の七〇年七〇年代階級斗争を全組織と名自の主体性・自主的創意をかけて斗うであろう。世界は我々のものである。すべての反動派は見たところ強くても、実際にはなにもたいした力はもっていない。なぜなら日で見れば、ほんとうに強大なかをもっているのは反動派ではなくて、人民である。」　――毛沢東――